

ユニテ

UNITÉ

13



目 次

| | |
|---------------------------|------------------|
| ロマン・ロランの言葉 | 1 |
| ロマン・ロランと中国文学Ⅱ | 相 浦 泉 2 |
| ロラン＝マルヴィエール往復書簡(補1) | 南大路 振一訳 23 |
| ユニテの広場 | 寺 田 由美子 39 |
| 友の会だより | 40 |
| あとがき | 43 |
| 研究所図書目録(6) | (付) |



日本・ロマン・ロランの友の会編

ロマン・ロランの言葉

— 私は宿命を信じません。宿命とは、私たちの権利放棄です。私たちの弱さにたいする弁解です、私たちが行動しないためにあたえるわるい口実です。誰も船の世話をしないなら、漂流するのは当然です。しかし人間の義務は戦うことです。不可能なことにたいしてでしょうか？ 何が可能で、何が不可能か、あらかじめ私たちにわかるでしょうか？ 後にくる人々だけが、それを批判できるでしょう。イエス、使徒たち、偉大な問題あるいは自由思想の先駆者であった古代または中世の人人は、落胆し、放棄する口実を私たちよりも千倍も有したにちがいありません。しかも彼らはそれをしなかったのです。ほとんどつねに、彼ら自身が粉碎され、彼らの思想はずっと（ときには幾世紀も）後に征服に成功したにすぎません。それでも征服しました。ですから宿命は存在しません。ただ強い意志、弱い意志、あるいは疲れた意志があります。

あなたはスタンレー（探検家）の自伝をおよみになったことがありますか？ 読んでごらんください。それは一つの強壮剤です。私はそれをゆっくり味わいながらのみました。もちろん、英語版はどこにでもみつかります。私はよいフランス語訳でよみました。パリのブロン社から出た二冊本で。— スタンレーとリヴィングストンはなんとというすばらしい意志、なんとという純粋な魂たちでしょう！ 彼らと対照的に、芸術と政治の世界はなんとあわれな蒼白いものでしょう！

バートランド・ラッセルの見事な著書（もしみつかるなら）もお勧めします。彼はケンブリッジのすぐれた教授で、ヨーロッパのもっとも優秀な哲学者で数学者の一人です。おそらくご存じでしょうが、彼は稀れな自由を保持した人です。私がお話したい最近の著書は、『社会再建の原理』という題で彼が昨年なした講演集です（ロンドン、アレン・アンド・アンウィン版）。澄んだ、先入主のない、恐怖心のない偉大なまなざしは美しいものです。……………

1917年5月10日木曜日

宮本正清 訳『したいソフィーア』より
山上千枝子

ロマン・ロランと中国文学 Ⅱ

相 浦 泉

『みすず』（1977年6月号）に「ロマン・ロランと中国文学」をかいてから早いものでもう4年の歳月が流れた。その間にまた別な資料も集まったし、また、前にかいたことではっきりしなかった点が明らかになったところもある。そういうものとしては、「補遺」を『ユニテ』6号（1977年10月）に、翻訳として「ロマン・ロランと魯迅『阿Q正伝』」〔原文は、戈宝権「談『阿Q正伝』的法文訳本」（『南開大学学報77年6期所載』）を『ユニテ』8号（1978年10月）にそれぞれ載せていただいた。

今回も4年前の「ロマン・ロランと中国文学」の場合と同じように、その後に蒐集した素材を年代順に排列したものを、「ロマン・ロランに関する資料（中国）年譜(2)」として章末に付しておきたい。前回の年譜と合わせればよいのだが、今、その暇がないし、それに今後さらにふえるものもありうるから、一応、今はこのままにしておいて、いつの日にか統一的な資料年譜を編成することにしたい。

今回蒐集した資料の項目に番号をつけてみると、45番までであり、「年譜(1)」の48項目に迫るほどに集った。もちろん、より瑣末な資料（作品の中にロマン・ロランの言葉を引用しているもの、たとえば、『人民文学』81年2号所載の黄宗英「八面来風」p.8）は見出しうるが、そこまでは載せない。逆に大きな資料で落ちているものがあるかもしれないことを恐れる。たとえば、『ジャン＝クリストフ』の傅雷による完訳本は1936年に第1巻が出て、2・3・4巻が日中戦争中、太平洋戦争前に出たことは一応わかっているが、具体的にその本を入手していないので、出版年・月が詳細にわからない。それでここにはそのことを記しておくが、「資料年譜」には今は一応欠いておき、後でわかってから補充することにしたい。この本は新中国が成立してから、1953年には再版（実際は、改訳されているのだが）され、さらに57年には人民文学出版社がそのままの版で発行している（羅大岡著『論羅曼・羅蘭』p.179による）。まったく不合理なことに『ジャン＝クリストフ』が文革中は禁書になっていたが、文革後になって1980年9月にはさらに印行され

た。この文革後発行の本は入手したので、「資料年譜」④にかき込んでおいた。大体、そんな風に「年譜」を作成してある。

さて、今回の「ロマン・ロランと中国文学 Ⅱ」では、やはり「年譜(Ⅰ)」に沿いながら、若干の問題について説明を記しておくこととしたい。

「年譜(Ⅰ)」の最初は、①雁冰「ロマン・ロランの宗教観」であるが、雁冰とは、^{イェンビン}沈雁冰、つまり、最近、亡くなった茅盾マウシュン(1896年7月—1981年3月)のペンネームであり、中国現代文学史の上でほとんど魯迅について偉大だと考えられているリアリズム作家であるが、彼もやはりすでに早くロマン・ロランに注目していたことがわかる貴重な資料である。

今までの資料でいちばん早く直接にフランスでロマン・ロランに接触し、『ジャン＝クリストフ』の最初の部分を翻訳し、ロランと魯迅を結びつける役割を果たした敬隠漁という人物の経歴やその意外な人生については、資料②戈宝権『「阿Q正伝」のフランス語訳本について—魯迅作品外国語訳本書話の三』(『ユニテ』3期8号に訳載)が詳細・具体的にこの人物を調査しており、敬隠漁を仲立ちとするロマン・ロランと魯迅との関係について、フランス国立図書館にまで調査と協力を依頼し、かなり真相に迫っている。この戈宝権の調査によれば、「ロマン・ロランは直接に魯迅に宛てて手紙を書いたことはなく、ただ彼の敬隠漁への返信の中で自分の『阿Q正伝』に対する批評の言葉を語ったのであるらしい」とする。

これが事実だとすると、魯迅研究の中でこの問題について重大な訂正をしなければならなくなるだろう。つまり、すでに紹介したように〔「ロマン・ロランと中国文学」19頁〕、1933年12月19日付けの魯迅の姚克という人に宛てた手紙にある、「しかし、ロマン・ロランの批評の言葉は、永遠に見つからないだろう、と思います。訳者の敬隠漁の話では、それは一通の手紙で、彼はそれを創造社に送りました。彼はながくフランスにいたので、このグループが私を嫌っていることを知らなかったのです。で、彼らに発表するようたのんだのですが、その時からさっぱり行方がわかりません。このことはもうだいぶ以前のことなので調べようもありません。私はもうさがすことはないと心にきめています」という言葉にかかわって

るからであり、もしかしたら、敬隠漁は魯迅に事実とちがうことを伝えたのかもしれない。それに、そうだとすれば、創造社はとんだ濡れ衣を着せられたことになるし、敬隠漁の言葉は、魯迅先生と創造社との間に猜疑の種をまいたことになる。それとも、もっと他に何かの事情があったのだろうか。戈氏はさらに、ロマン・ロランの「阿Q正伝」に対する批評の言葉は公開されたことがなかったこと、ロマン・ロランの『阿Q正伝』に対する批評の言葉は、敬隠漁へのロランの返書の中にかかれたものであった、ことなどを明らかにしている。その全文は訳載したから詳細はここにくりかえさないが、戈宝権氏の論文が、ロマン・ロラン、魯迅、『阿Q正伝』をめぐる問題について事実関係を相当なところにまで追いつめた点は注目に値する。

今回の「年譜（2）」でさらに新しく明らかになったもう一つの点は、1936年の⑬～⑯の資料であり、それらはロマン・ロランの七十歳生誕を記念して中国でもロランへの大きな関心が示された時であることを示している。それは考えてみると、日中戦争の始まる前年であり、日本の中国に対する侵略戦争開始前夜の危機的な暗い時代にロランへの深い尊敬と支持が中国の知識人の間に澎湃と広がっていたことを示しているのである。

たとえば、⑬黄源の「ロマン・ロランの七十歳生誕」という文章では、黄源はロランの『ベートーベンの生涯』の「序」（1903年1月）の中の次の言葉、「空気はわれらの周りに重い。旧い西欧は、毒された重苦しい雰囲気の中で麻痺する。偉大さのない物質主義が人々の考えにのしかかり、諸政府と諸個人との行為を束縛する。世界が、その分別臭くてさもししい利己主義に浸って窒息して死にかかっている。世界の息がつまる——もう一度窓を開けよう。広い大気の流れ込ませよう。英雄たちの息吹きを吸おうではないか。」

「人格が偉大でないところに偉人はない。偉大な芸術家も偉大な行為者もない。あるのはたださもししい愚衆のための空虚な偶像だけである。時がそれらを一括して滅してしまふ。成功はわれわれにとって重大なことではない。真に偉大であることが重要なことであって、偉大らしく見えることは問題ではない。」（以上および以下の引用文はすべて、みすず書房、『ロマン・ロラン全集』14巻、片山敏彦訳「ベ

ートーヴェンの生涯」p8, p9によった)を引用して、

『これはロマン・ロランが当時の重苦しい世紀末の風潮に反抗した戦いの書である。「世界の息がつまる——もう一度窓を開けよう。広い大気を流れ込ませよう」と。ロマン・ロランの生涯、その七十年間はこのような精神にもとづいて誠心誠意この窒息した世界のために窓を開き、自由の空気を流れ込ませようとしたのだ。それはとりもなおさず、次のことのためである。世界大戦が勃発し、全ヨーロッパが赤く血に染まり、砲声がとどろいていたとき、彼はひとり『戦いを超えて』スイスに逃れ、ただの一人で万人を敵とする精神をもって、大声疾呼して戦争に反対した。また、世界の一角にひとつの新しい世界が現れ、旧世界全体がよりいっそう暗黒につつまれたとき、彼はさらに勇気を振って先頭に立ち、『過去への訣別』を行い、新しい陣営に参加して、自己の精神の祖国のために防衛の戦士となった。……』

と述べている。戦争反対と、新しい世界への勇氣ある前進が、彼の作品を通じ、彼の人格を通じて、この地球上の人と人とを、心と心を結びつけ、遠くアジアにいる中国の知識人たちに感銘と鼓舞を與え、精神の糧^{かて}を與えつづけていたのである。そして1937年に始まる日中戦争中の暗い時代にも、若い読者は、『ジャン＝クリストフ』の一揃えを所蔵していると宝物のようにみなし、先を争って回し読みをしたといわれている。

こうして資料⑬から⑯まで、戦争前夜の中国の雑誌や新聞にロマン・ロランへの敬仰の記事が載せられたのである。

次に述べておきたいのは、ロマン・ロランの代表的な名作『ジャン＝クリストフ』の訳本についてである。「ロマン・ロランと中国文学」ではある程度ふれておいたし、著名な訳者である傅雷のこともかいておいたが、その後、中国の新刊書紹介・評論を目的とする『読書』という雑誌に成柏泉という人が「中国における『ジャン＝クリストフ』」⑳をかいて、この問題をかなり明らかにしてくれているので、それもここに紹介しておきたい。

「ロマン・ロランと中国文学」ですでに述べたように、1926年に敬隱漁という人が『小説月報』に『ジャン＝クリストフ』を翻訳・掲載したのが中国での初訳で

あったが、これは雑誌に3回連載されただけで、未完に終わった。

1935年に鄭振鐸(1898-1958)主編の『世界文庫』の企画があり、世界文学の名著の翻訳を目ざしたが、その中に『ジャン＝クリストフ』が含まれ、創造社系の著名作家である鄭伯奇(1895-1979)が翻訳することになっていた。しかし、この企画は宣伝倒れになってしまい、やはり実現することがなかった。

1936年になって、中国の大出版社である商務印書館がなんの宣伝も前ぶれもなしに、傅雷が翻訳した『ジャン＝クリストフ』第一巻を出版し、商務印書館の『世界文学名著』叢刊の中の一冊に組入れられた。この訳本が出て『ジャン＝クリストフ』は一挙に読書界からの歓迎を受けることとなった。小さな例だがそれまで、ジャン＝クリストフのジャンは、中国ではさまざまな音訳がおこなわれ、「若望」「哲安」などとかかれていた。また、たとえば、最近亡くなったサルトルの名前も同じJeanであるが、これにはふつう発音が近い「讓」という文字を表記として当てている。しかし、ジャン・クリストフのJeanを傅雷が「約翰」と訳してからは、ロマン＝ロランのこの小説に限って「約翰」が用いられることになった。それほど傅雷の『ジャン＝クリストフ』(『約翰・クリス朵夫』)は中国の読者の間に定着し根付いてしまっていて、文革後に出版されたものもずっと傅雷の訳が用いられているのである。

さて、成氏の文によって、さらに紹介をつづけると、『ジャン＝クリストフ』の第二、第三、第四巻は日中戦争中から太平洋戦争前にかけて(1937～1941)の時期に次々と出版された。当時、中国国内は戦争の影響で交通状況はきわめて困難であったが、相当量のこの書物が内陸部へ運ばれ、桂林や重慶などの大都市に流布した。当時、青年読者の間では、『ジャン＝クリストフ』を一揃え所蔵しているものは、みな宝物のように見なし、先を争って廻し読みをした。こうして日中戦争前夜から戦争中にかけて傅雷訳『ジャン＝クリストフ』は中国の読者の間では“一世を風靡”することとなったのである。第2次世界大戦が終って、1946年には上海の駱駝書店(生活書店の子会社)がもとの商務印書館版によって再版本を出した。

傅雷はさらに、新中国成立(1949)後、この大部の書を新たに改訳し、1953年に上海の平明出版社(この書店は社会主義改造の政策に従って、1955年に公私合

営企業となり、新文芸出版社に併合された)から新訳本を出した。1957年1月に人民文学出版社から出版されたものはまったくこれの再版本なのであり、さらに文革後に出された『ジャン＝クリストフ』もやはり傅雷の1953年改訳本なのである。

はじめに述べたように、以上は、成柏泉氏の「中国における『ジャン＝クリストフ』」によって、別な論旨をとり除いて、『ジャン＝クリストフ』の訳本の流れのみをとり出して紹介したのだが、これによって中国における『ジャン＝クリストフ』訳本の流れの筋道をかなりよく理解できるものと思う。つまり、第2次大戦前の傅雷の旧訳本と、1953年の新訳本の2種類があったことがわかる。

成氏も述べるように、『ジャン＝クリストフ』にもし傅雷の勤勉な労働がなければ、中国の読者は早く四十年前も前にその完訳本をもつことはできなかったのである。

ちなみに、傅雷(1908-1966)は中国でもことに著名な翻訳家であり、バルザック、ロマン・ロラン、ヴォルテール、メリメ、モーロアなどの作品を翻訳した人である。彼は全部で三十一部の外国文芸作品を翻訳したが、バルザックの翻訳がもっとも多く、そのうち十四部を占めている。ロマン・ロランの作品については『トルストイの生涯』『ミケランジェロの生涯』『ベートーヴェンの生涯』とそして大作『ジャン＝クリストフ』の翻訳をした。

彼は上海市南匯県漁潭郷で生まれた。1927年にフランスに留学し、31年に帰国している。40年ごろから外国文学、ことにフランス文学作品の翻訳の仕事をはじめた。その翻訳態度は謹厳で、原作の精神を重んじ、原作を4、5回精読してからでなければ、翻訳の筆をとらなかったと言われる。傅雷の翻訳に対する考えは、「理想の翻訳とは原作者の中国語による創作なのだ」というのであり、いわば、翻訳を再創作なのだ、と考えていたのである。残念なことに、文革中に迫害され、66年9月3日、恨みをのんで亡くなった。しかし最近では傅雷の遺訳がつつぎに出版され、『ジャン＝クリストフ』もその苦心になる改訳本が現在中国での完訳定本となって流布しているのである。しかし中国で『ジャン＝クリストフ』の翻訳者にこのような苦難の運命が待ちうけていたことに、私は悲しみとも憤りとも言いようのない感慨を覚えるのである。

年譜資料に沿って、もうひとつ書いておかなければならないことがある。

それは資料⑥の羅大岡『ロマン・ロラン論』をめぐる問題である。

このことについては 実は、『ロマン・ロラン全集』（みすず書房、1981・7・10発行）の『全集月報20』に、「帰ってきたジャン＝クリストフ——羅大岡著『ロマン・ロラン論』をめぐる——」として書いておいた。しかし今、「年譜(2)」に沿ってあらためてその主な経過をかきとめておきたい。

まず、新中国成立以後の状況を簡単にふりかえっておこう。

1954年の夏に『文芸学習』の読書リストに『ジャン＝クリストフ』が挙げられ、1955年の『訳文』にゴーリキー「ロマン・ロランについて」が記載されるなど、ロマン・ロランは新しい秩序を形成しつつあった中国文化界でも尊重される位置におかれるようになった。魯迅逝世二十周年記念大会で茅盾が講演をして、魯迅とロマン・ロランが偉大さの性質において似かよっている、ことを指摘した。この評価は中国ではそのままその後もひきつがれていったように見える。こうして、57年1月には傅雷新訳の『ジャン＝クリストフ』が出版された。「年譜(2)」によって見ても、57年、58年にはほかに『ロマン・ロラン文鈔』⑦と『ロマン・ロラン文鈔続編』⑧の2冊が出版されている。この資料は香港大学中文系講師の黎活仁氏に教示され、目次、序文等のコピーを送っていただいたが、書物は入手していない。訳者の孫梁は、「ロマン・ロランについて——序に代えて」の中で次のように述べている。

「ロマン・ロランは徹底的に研究するにあたいする。なぜならロランは近代西欧インテリゲンチヤの典型的代表のひとりであり、その歩んだ道は、大多数の過渡期の、正義感に富んだインテリの曲折の歷程であるからだ」

『ロマン・ロラン文鈔』の訳業は、この序によると、1953年夏に開始され、54年に完稿しているが、これはロラン逝世10周年を記念するものであった。『文鈔』には「序詩」として「平和の祭壇」（『先駆者たち』より）が訳され、正編には、
論文：『戦いを超えて』『先駆者たち』

日記：『戦時日記選』

自伝：『内面の旅路』

が訳載されており、附録として、ソビエトのトルスチンコ、ニコラエワの論文が添えられている。全250頁。

『文鈔続編』には、

書簡：『マルヴィーダとの往復書簡』

音楽評論：『一般史における音楽の地位について』『モーツァルト—その書簡によって』

が訳載されている。全250頁。

これらの情況からみれば、ロマン・ロランの評価は社会主義中国の文学の中に正当に位置づけられていたことがわかる。

しかし、中国国内の政治・思想情勢を見ると、56、57年には、私がミニ文革と呼んでいる反右派闘争が進められ、厳しい情況が始まっていた。そういう中で、ロマン・ロランのみならず、一般に、外国文学をどう評価し、位置づけるか、という問題が起こってきた。「年譜②」④⑤⑥⑦などにみられる、馮至、羅大岡などの人々による論文はこのような情勢にこたえて書かれたものだったと思われる。そうして、今知られる資料によれば、1958年から激しい批判運動が組織されるようになったらしい。

「思い出してみると、『ジャン＝クリストフ』に対する討論は1958年から始まった。当時、個人主義とヒューマニズムに対する批判が政治運動と呼応して、いくつかの高まりを見せていた。クリストフはとくに個人奮闘と資産階級ヒューマニズムの典型とみなされ、知識人の「反党反社会主義」の思想の根源の一つと見なされてしまっていた。」（資料③柳前「『ジャン＝クリストフ』を再読しての随想」による）。

というのであるから、58年ごろから『ジャン＝クリストフ』を公然と読むことはできなくなっていたであろう。

この文化ファシズムの情況は、途中での曲折があったにしても、文革が終り四人組が打倒される（1976）まで続いている。従って「年譜②」にもこの間にはロマン・ロランに関する資料は空白である。

羅大岡『ロマン・ロラン論』⁹⁶は1979年2月に出版された。それは四人組が打倒されてから1年4ヶ月たってからである。

この書物は、中国の研究者がフランス語の第一資料を大量に駆使して全面的・組織的に書いた外国作家研究書としては中国にも数少ない貴重なものであった。中国におけるロマン・ロラン研究の集大成とも言うべき著作であった。著者の羅大岡（1909 - ）はヨーロッパに14年間も留学し、フランス語による著作もあり、1947年帰国後は北京大学などの教授を歴任した、中国でも第一級のインテリである。この羅大岡の『ロマン・ロラン論』は、全462頁、巻上、「作家と時代」（24章）、巻中「生活と鏡」（7章）、巻下「内面の旅路」（16章）の三部分からなり、資料として「ロマン・ロランと中国」「ロマン・ロランについての参考書」を添えている。日本語に訳せば、頁数はもとの2倍にもなる。

読んでみると、著者が20年もかけて集大成しただけに、ロマン・ロランの生涯や時代背景、作品について詳細な叙述を加えている。しかし、この書物の副題は「資産階級人道主義の破産」とかかれており、さらにこの本の最初におかれている「序に代えて」という文の題名は、「ロマン・ロランへの訣別」とはっきり書かれていて、徹底的なロマン・ロラン批判の立場を貫いている。羅大岡の論点は要約すると、

ロマン・ロランは第1次世界大戦後の世相の中で、しだいに現実を目を開き、進歩的な立場に移ったけれども、その思想や意識は尖鋭・複雑な矛盾に満ち、資産階級知識人として、進歩を求めるジグザグのけわしい道を摸索し、奮闘した。そこには学ぶべき教訓はあるが、その最も重要な思想内容は、「資産階級人道主義」であり、その「自由」「人道」「個人的奮闘を分析し、批判しなければならない」と考える。そして、1931年にロマン・ロランの書いた「過去への訣別」と同じ精神で、彼に別れを告げ、彼の思想や観点到別れを告げ、彼の精神に従って前進しよう、と主張するのである。そのために羅大岡『ロマン・ロラン論』は、この「序に代えて」の観点によって批判的立場が貫かれることとなり、ロマン・ロラン像を一面的にゆがめてしまうこととなったのである。

この書物が書かれたのは、前述のような時代背景の中でであり、出版時期が1979

年2月という、中国がまだ文革期の影響から十分に脱しきれていない時であった。もっとも蔣俊「評価を誤った作家論の専著『ロマン・ロラン論』」^{④5}では、四人組打倒後、2年も経っているのに、著者が相変わらずこんな観点をロマン・ロラン批判の根拠にしているのは驚きだ、とまで述べている。しかし恐らく羅氏の原稿は79年2月よりもっと早い時期にまとめられていたであろう。

今、羅大岡がロマン・ロラン批判の最も重要な観点だとしている「資産階級人道主義」という問題にだけしぼって、羅大岡の次の三つの資料に見られる主張を比較してみたい。

- I. 『ロマン・ロラン論』の「序に代えて」^{④6}(1979年2月)
- II. 「ロマン・ロランと資産階級人道主義」^{④7}(1979年9月)
- III. 『ジャン＝クリストフ』(79年版)に対する羅大岡の「序」^{④8}(1980年9月)

この3資料を比較してみると、

- I. 「ロマン・ロランの重い思想の風呂敷を開けてみれば、人たちは、もっとも重要な問題が資産階級人道主義であることを、すぐに見出すことができるだろう。ロマン・ロランの誤った観点に対する批判・分析によって、われわれはさらに一歩を進めて、資産階級人道主義の今日における消極的意義と危険性を認識する助けとすることができるだろう(同書「序に代えて」3頁)
- II. ロマン・ロランはかけねなしの資産階級人道主義者だとし、その資産階級人道主義を二つに分析して、積極面と消極面とに分ける。そして「ロマン・ロランの進歩的傾向が一貫して挫折に屈することなくつづけられた」点は評価するが、しかし、なぜ資産階級人道主義という思想の重荷を早く棄てて身軽に前進しなかったのか、という点を批判する。(『外国文学研究集刊』第1輯、57頁)
- III. 「全体として言えば、この小説(『ジャン＝クリストフ』を指す)の主導思想には二つの面がある。人道主義と個人英雄主義である。クリストフ型の個人主義の出発点は、個人の奮闘を通して人類社会にすこしでも有益なことをやり、人類の相互の友愛と団結に貢献しようという点にある。そこで、このような個人主義

を「積極的個人主義」と呼ぶ人もある。実際、このような個人主義の基礎もまた人道主義であり、それは人道を達成するための一つ的手段であり、人道主義の一種の表現形式なのであって、人道主義の系列に入れうるものなのである。従って、われわれは『ジャン＝クリストフ』の最も根本的な、全体的な主導思想は人道主義なのだと考えてさしつかえない」（「訳本序」9頁）

文章の中の一部を直接に翻訳したり、説明として簡単にまとめたりしたために、十分な比較になりにくいと思うけれども、

Ⅰは、ロマン・ロラン評価について、マイナスの面に重点をおいており、Ⅱは、プラスとマイナスの両面があると主張し、Ⅲでは、「資産階級」というマイナスの規定をとり除いて、真の意味の積極的な人道主義だとして、プラス評価に移っている。

われわれ日本人にとってみれば、ひとりの研究者の所説が時流に従って短期間にこれほど目まぐるしく変化することに奇異な感じをもたされるだろう。ここに見られる苦渋にみちた論点移動は、明らかに、「文革」→「脱文革」、という過程に照合している。中国では、政治と文学（研究）の距離が近かった、というよりも、時には両者が融合してしまっていた、時期があった。文革期はまさにそのような時期であった。そういうわけで、個人は政治の社会構造の枠組の中にとりこまれたまま変化した、というよりも変化させられたのである。そのことを主体性喪失の悲劇的な状況だときめつけることはもとより容易だが、単に個人の主体性喪失を責めるだけではおさまらない、大きな力が狂暴に働いた現実も凝視しておかねばならないだろう。しかし、今はそのことを論ずるのが主目的ではないから、さらに話の本筋にもどりたい。

さて、1980年になると、成柏泉「中国における『ジャン＝クリストフ』」^⑨があり、文革期に禁書とされていた『ジャン＝クリストフ』が再び出版されたことを喜び、その翻訳の歴史的経過を述べ、また羅大岡『ロマン・ロラン論』に対する批判を行っている。そして、たとえば、

「『鋼鉄はいかに鍛えられたか』（オストロフスキー著、主人公パーウェルコルチャーギンが不屈の闘志で自分を共産主義的に鍛えていった物語）を愛読する大衆

は、必ずしも『ジャン＝クリストフ』を愛読するとは限らない、その逆もまたしかりである」（巻中、四章、177頁）

と羅大岡が述べるのに対して、

成柏泉は、

「『鋼鉄はいかに鍛えられたか』を愛読する大衆は、必ず『ジャン＝クリストフ』を愛読する、その逆もまたしかりである」（『読書』47頁）

に改めるべきだと主張する。成柏泉の提案の方が羅大岡のもとの意見よりもずっと妥当な意見だと私は思う。

羅大岡がその論点を移動させてきていることはすでに見た通りであり、ジャン＝クリストフは1980年9月に再び訳者の傅雷とともに中国の読者の前に帰ってきたのである。羅大岡もまたロマン・ロランと訣別することなく、ジャン＝クリストフに伴われて帰ってきたのである。そうして、1980年10月には、羅大岡は『魅せられたる魂』上巻の訳④を人民文学出版社から出版した。従来、中国ではまだ『魅せられたる魂』の翻訳は完成されていなかった。したがって、これは中国での初訳なのである。もっとも羅大岡『ロマン・ロラン論』附録の「ロマン・ロランについての参考書」（455頁）によると、

『魅せられたる魂』（中国訳題名は『母與子』）には、『搏闘』（『格闘』という意味）という題名のダイジェスト訳本があり、英訳本から重訳されたものであった。頁数はほぼ原著の5分の1、陳実、秋雲の共訳、広州、人間書屋、1951年初版。

という本がある。しかし、完訳としては、羅大岡の訳本が中国で最初のものである。『欣慰的靈魂』という訳題名が使われることもあるが、『魅せられたる魂』に中国語題名として『母與子』としたのは羅大岡の持説によるものらしい。

1980年12月の柳前という人の「『ジャン＝クリストフ』を再読しての随想」④は、読者として再びジャン＝クリストフにめぐり会えた喜びを、文革中の苦い経験とともに語っており、遠慮深い羅大岡への批判となっている。それに対して、1981年の『文芸報』（11期）に掲載された蔣俊という人の「評価を誤った作家論の専著『ロマン・ロラン論』は、真向からの羅大岡『ロマン・ロラン論』批判である。

蔣俊はこの論文で次のように総括している。

「『ロマン・ロラン論』の著者の、ロマン・ロランの資産階級人道主義に対する批判は、絶対化され、無限に誇大化されていて、ロランの主要な、輝やかしい面を、掩いかくしてしまい、主客を顛倒し、評価を誤り、世界的名声をもつ文学の巨匠を、人道主義を宣揚する資産階級個人主義者だときめつけている。このことはこのような歴史的人物を評価するにはきわめて不公平なやり方だ」と齒に衣を着せずにきめつけている。

さらに蔣俊は、羅大岡が『ジャン＝クリストフ』「序文」で、まだ自己批判はしていないが、ロマン・ロランに対する見方がある程度改めた点を指摘して、「われわれは著者が思想を解放し、よりいっそう事実を正視して外国文学を研究し、この領域でより大きな貢献をするよう希望する」

と述べている。

中国における悲劇的な季節の終結とともに、ロマン・ロランも暗い世界を通り抜け、文革後の中国で再び公正に位置づけられ、あるべき尊敬を受けるようになった。ロマン・ロランと中国文学の関係の中で、それは息づまる暗い季節であった。この時期を越えて、ロマン・ロランはもとどおり中国に力強く輝やかしくたしかに存在することとなった。それはまったくロマン・ロランの偉大さのせいであった。

1981年7月25日

付：

羅大岡『ロマン・ロラン論』附録の「ロマン・ロランについての参考書」の中に挙げられた中国語訳本のリストをここに記載しておきたい。中国国内での訳本を知るのに便利な資料だからである。なお、羅氏も述べているように、なお完全ではない。

1. 《約翰・克利斯朵夫》『ジャン＝クリストフ』、1948年、駱駝書店出版。1953年、平明出版社再版。その後、人民文学出版社が平明出版社の訳本を翻刻した、全4冊、傅雷訳。（注：これは羅氏の誤りであり、53年の平明出版社版は傅雷の新訳本であること、成柏泉の論文⑨に指摘されている。
2. 《母與子》『魅せられたる魂』、には《搏闘》という題名のダイジェスト訳

本があり、英訳本から重訳されたもので、ページ数は原著のほぼ5分の1、陳美・秋雲の共訳、広州、人間書屋、1951年初版。

3. 《現代音楽家評伝》『今日の音楽家たち』（?）、白樺訳、上海、群益出版社、1950年版。

4. 《愛與死的搏闘》『愛と死との戯れ』、李健吾訳、上海、文化生活、1950年出版。

5. 《狼群》『狼』、沈起予訳、三聯書店、1950年出版。

6. 《韓徳爾伝》『ヘンデル』、嚴文蔚訳、新音楽出版社、1954年版。1963年北京第二次印刷、中国語訳名は《亨徳爾伝》。

7. 《七月十四日》『七月十四日』、齊放訳、作家出版社、1954年出版。

8. 《羅曼・羅蘭革命劇選》『フランス革命劇選』、齊放訳、人民文学出版社、1958年出版。

9. 《哥拉・布勒尼翁》『コラ・ブルニヨン』、許淵冲訳、人民文学出版社、1958年出版。

10. 《羅曼・羅蘭文鈔》『ロマン・ロラン文抄』、孫梁訳、上海、新文芸出版社、1957年出版。

11. 《羅曼・羅蘭文鈔続編》『ロマン・ロラン文抄続編』、孫梁訳、上海、新文芸出版社、1958年出版。

12. 《愛与死》『愛と死との戯れ』、夢茵訳、上海泰東書局、1928年出版。

13. 《七月十四日》『七月十四日』、賀之才訳、商務印書館、1934年出版。

14. 《聖路易》『聖王ルイ』、賀之才訳、世界書局、1944年出版。

15. 《理智的勝利》『理性の勝利』、賀之才訳、世界書局、1947年出版。

16. 《李柳麗》『リリュリ』、賀之才訳、世界書局、1947年出版。

17. 《哀爾帝》『アエルト』、賀之才訳、世界書局、1947年版。

18. 《丹東》『ダントン』賀之才訳、世界書局、1947年版。

19. 《群狼》『狼』、賀之才訳、世界書局、1947年版。

20. 《愛与死之賭》『愛と死との戯れ』、賀之才訳、世界書局、1944年出版。

21. 《托爾斯泰伝》『トルストイの生涯』、傅雷訳、商務印書館、1947年出版。

1950年第6版。

22. 《貝多芬伝》『ベートーヴェンの生涯』, 傅雷訳, 商務印書館, 1947年出版。

23. 《弥蓋朗琪羅伝》『ミケランジェロの生涯』, 傅雷訳, 商務印書館, 1947年出版。1950年第3版。

24. 《甘地奮闘史》『マハトマ・ガンジー』, 謝澂訳, 上海, 卿雲図書公司, 1930年出版。

25. 《甘地奮闘史》『マハトマ・ガンジー』, 米星如, 謝頌羔編訳, 上海, 国光書店, 1947年出版。

26. 《甘地》『マハトマ・ガンジー』, 陳作梁訳, 商務印書館。

27. 《弥菜伝》『ミレー』, 五四時期からしばらくして, 北京に『駱駝草』という題名の不定期刊行物があり, 『ミレー』のいくつかの部分の中国語訳を登載したが, 完全ではなく, 単行本にもならなかった。

28. 新中国成立以来, 『世界文学』等の刊行物に, 少しばかりロマン・ロランの著作の訳が発表されたことがある。たとえば, 1961年4期には, 『過去への訣別』が載せられた。これらについては, それぞれの調査をまだしていない。

ロマン・ロランに関する資料(中国)年譜(Ⅱ)

(相浦)

1980・8・20

| | | |
|---|-----------|--|
| 1 | 1921・5・15 | 雁冰<羅曼羅蘭的宗教觀>(《少年中国》第2卷11期) [《中国新文学大系》⑩史料索引, 《五四時期書刊紹》第1集, 《茅盾評論集》第5集, 孫仲田《茅盾著譯年表》(吉林師大學報1978・1)などによる] |
| 2 | 1924・7・17 | ロマン・ロランの敬隱漁への返書(《小説月報》16卷1期1925・1・10所載)[<羅曼羅蘭給敬隱漁書>手蹟, 敬隱漁譯文] |
| 3 | 1926・1・24 | 敬隱漁(在リヨン)の魯迅への第一信(<阿Q正伝>の翻訳) |

- の件およびロマン・ロランのことにふれている。魯迅はこの手紙を1927年2月20日に受取った)
- 4 1926・3・2 全飛・栢生<羅曼羅蘭評魯迅>(《京報副刊》1926・3・2)
〔《洪水》2卷5期, 敬隱漁<讀了「羅曼羅蘭評魯迅」以後>の編者後記による〕
- 5 1926・5・? 敬隱漁<讀了「羅曼羅蘭評魯迅」以後>〔《洪水》2卷5期〕
- 6 1926・5・15 敬隱漁訳<阿Q正伝>前半(第1章~5章)〔ロマン・ロラン主編《Europe》41期に掲載, “La Vie de Ah Qui”, ただし, 原作の序文を省いているので, 原作の第2章~6章の訳, 魯迅の名を誤ってLou-Tunにつづる。訳の前に魯迅および<阿Q正伝>を紹介した短い前文を付す〕
- 7 1926・6・15 敬隱漁訳<阿Q正伝>(“Europe” 42期)〔<阿Q正伝>訳の資料は戈宝権「談《阿Q正伝》的法文譯本——魯迅作品外文譯本書話之三」(《南開大学学報》1977年6期)による〕
- 8 1926・7・1 魯迅《Europe》(たぶん5月号)を受取る
- 9 1927・10 R. M. Barlette<中国革命の思想界の指導者たち>(“Current History”)[この中でロマン・ロランの<阿Q正伝>評を紹介している。前記戈宝権論文による]
- 10 1933・11・5 魯迅のY・K(姚克)への手紙〔「法文本是敬隱漁譯(四川人, 不知如何拚法)」, 《魯迅書信集》および戈論文による〕
- 11 1933・12・19 魯迅の姚克への手紙〔「但是, 羅蘭的評語, 我想將永遠找不到。据譯者敬隱漁說, 那是一封信, 他便寄給創造社——他久在法國, 不知道這社是很討厭我的——請他們發表, 而從此就永無下落。這事已經太久, 无可查考, 我以為索性不必搜尋了」《魯迅書信集》による〕(年譜 | ㉞に12・11とするは誤りにつき訂正)
- 12 1935・1 エドガー・スノウ「魯迅——口語文の大家」〔《魯迅——白話文的大師》, 《アジア》所載, 前記の戈論文による〕

- 13 1936・4・15 黄源<羅曼羅蘭七十誕辰>〔《作家》第1卷1号(1936年4月15日出版)〕
- 14 1936・
 <譯文>羅曼羅蘭七十誕辰紀念
 <法蘭西與羅曼羅蘭的新遇合>(布洛克作)黎烈文譯
 <詹恩克里士多夫論>(亜蘭作)陳占元譯
 <貝多芬筆談>(羅蘭作)世彌
 <向高爾基致敬>(羅蘭作)陳占元譯
 <論個人主義與人道主義>(羅蘭作)陳占元譯
 [第一卷第二期的《譯文》所載。——これは上記《作家》第1卷第1期(上海雜誌無限公司1936・4・15)の広告にもとづいてとりあげた]
- 15 1936・6・1 ロマン・ロラン<70年の回顧>の中国語訳〔荻譯<羅曼羅蘭七十年的回顧>(《西北風》半月刊,第3期,1936年6月1日出版,漢口華中圖書公司發行)〕
- 16 1936・6・17 梁宗岱<憶羅曼羅蘭>(《大公報》1936年6月17日「文藝」欄164期)
- 17 1936・10・24 王鈞初<魯迅先生逝世哀感(パリ《救国時報》)〔“前些年當《阿Q正傳》譯成了法文出版時,法国当代文豪羅曼羅蘭讀了會為之下泪,並有好評發表在《世界》雜誌上”——㊸戈論文p49による〕
- 18 1941・1・10 羅曼羅蘭,蕭伯納,高爾基,巴比賽等作<關於列寧>(《文芸陣地》第6卷1期,1941年1月10日,<列寧逝世紀念特輯>)[《中国現代文芸資料叢刊》第1輯所収の<文芸陣地総目による〕
- 19 1945・6・ 懷悼羅曼・羅蘭(特集)〔《抗戰文藝》10卷第2・3期合刊所載——《中国現代文藝資料叢刊》第1輯(上海文藝出版社,1962)の総目録による〕
 羅曼・羅蘭像(木刻) 余所亜

- 19 1945・6・12 <悼念羅曼・羅蘭> (悼辭) 中華全國文藝界抗敵協會
 永恒的紀念与景仰 茅盾
 大勇者的精神 蕭軍
 羅曼・羅蘭 法・阿拉貢作 焦菊隱譯
 從人道主義到反法西斯 焦菊隱
 敬悼羅曼・羅蘭 孫源
 羅曼・羅蘭年譜簡編 冷火
- 20 1947・8・30 郭沫若<一封信的問題>〔㉔戈論文 p 49〕
- 21 1948・9・ 力夫<羅曼・羅蘭的「搏鬥」——從個人主義到集体主義的道路> (《大衆文芸叢刊》香港・生活書店) [この資料は、あるいは《羅曼・羅蘭文鈔》(1957年5月、孫梁訳)の訳者序文である<關於羅曼・羅蘭——代序>のIX頁注②“以上引句見“從個人主義到集体主義的道路”，邵荃麟為<搏鬥>所作序言，人間書屋版”とあるものと同一のものかもしれない。もしそうであれば作者の力夫はすなわち邵荃麟ということになり、またこの資料は1948年9月より早く人間書屋版で出ていたことになるかもしれない]
- 22 1955・1・ 羅曼・羅蘭像(木刻)(封面)黃永玉作
 高爾基和羅曼・羅蘭在高爾克村別墅的花園中散步(1935年7月)
 羅曼・羅蘭夫婦在高爾克村與高爾基合影(1935年7月)
 羅曼・羅蘭畫像(法国 格拉尼埃作)
 <以上四項は《譯文》1955年1月号の挿繪)>
 馬克辛・高爾基<論羅曼・羅蘭>戈宝權訳
 羅曼・羅蘭<我走向革命的道路>戈宝權訳
 羅曼・羅蘭<我為誰写作>陳西禾訳
 羅曼・羅蘭<鼠籠>陳西禾訳
 瑪麗・羅曼・羅蘭<羅曼・羅蘭和一個青年戰士>陳西禾訳

- (以上五項は《譯文》1955年1月号所載)
- <紀念羅曼・羅蘭>戈宝権・陳西禾(《譯文》1955年1月号の<後記>としてかかれています)
- 23 1955・7・ ロマン・ロラン『戦時日記』についてのソ連の情況の紹介
(『蘇聯「新世界」和「星火」雜誌發表羅曼・羅蘭的「戦時日記」』王復加)〔《訳文》1955年7月号<文芸動態>より〕
- 24 1955・8・ 黄秋云<揭穿胡風反革命集團對羅曼羅蘭的歪曲>〔《訳文》55年8月号〕
- 25 1955・11・ 羅曼・羅蘭<真正人民的革命>
1. 「向自由的和帶來了自由的俄羅斯致敬」(1917年5月1日) 蘇牧訳
 2. 「戦時日記」(1917年春・夏・秋部分の断片)
盛澄華訳
- [これらは《訳文》1955年11月号—《偉大的十月社会主义革命三十八周年紀年》特集として記載されたものであり、《訳文》<後記>にもロランにふれているところがある]
- 26 1957・1・ 孫梁<關於羅曼・羅蘭——代序>(《羅曼・羅蘭文鈔》の序文としてかかれた)〔この序文で、作者は、「ロマン・ロランは徹底的に研究するにあたいする。なぜならロランは近代西欧インテリゲンチヤの典型的代表のひとりであり、その歩んだ道は大多数の過渡期の正義感に富んだインテリの曲折の歷程であるからだ」と主張する。なおこの序文から「ロマン・ロラン文鈔」の訳は1953年夏に開始され、1954年に完稿、ロラン逝世10周年を記念にしたものであったことがわかる]
- 27 1957・5・ 孫梁訳《羅曼・羅蘭文鈔》(上海、新文芸出版社、1957年5月、全250頁)
- 28 1957・10・ 孫梁<前言>(《羅曼羅蘭文鈔続編》の「まえがき」として

- かかれた) [この「まえがき」によって、孫梁には、このときやがて華東師範大学学報に発表されるはずの<論羅曼・羅蘭思想与芸術的源流>という論文があることがわかる。未見]
- 29 1958・3・ 孫梁訳<羅曼・羅蘭文鈔統編>(上海, 新文芸出版社, 1958年3月, 全250頁)
- 30 1961・ 葉靈鳳<敬隱漁与羅曼羅蘭的一封信>(香港, 1961年出版<新雨集>所載) [戈宝権の論文(南開大学学報, 1977年6期)のp. 49による]
- 31 1976・4・20 敬隱漁とともにリヨンへ留学したことのある林如稷からの戈宝権への返書 [戈宝権論文 p. 50による]
- 32 1977・ 戈宝権<談<阿Q正伝>的法文訳本——魯迅作品外文訳本書話之三>(《南開大学学報》1977年第6期所載) [「ユニテ」(3期8号, 日本・ロマン・ロマンの友の会編, ロマン・ロラン研究所発行)に相浦果による日本語訳あり]
- 33 1978・10・15 『ジャン=クリストフ』がはじめてフランスのテレビに上映されたというニュース(『世界文学』1978年1期)
- 34 1978・11・ 戚楽安・範信龍・井勤蓀訳<高爾基, 羅曼・羅蘭通信選>(『文芸論叢』5, 上海文芸出版社, 1978年11月) [ゴークーとロマン・ロランの書簡, 1923年, 1933年, 1934年のものについての翻訳]
- 35 1979・5・ 羅新璋<読傳 雷訳品随感>(《文芸報》1979年5期)
- 36 1979・2・ 羅大岡<論羅曼・羅蘭>(新文芸出版社)
- 37 1979・9・ 羅大岡<羅曼・羅蘭与資産階級人道主義>(《外国文学研究集刊》第1輯, 中国社会科学院外国文学研究所編, 中国社会科学出版社, 1979年3月の前文, 9月出版) [この論文は「外国現当代資産階級文学評価問題の討論」の中のひとつとして書かれたもの。この討論会は1978年後半期に行われた]
- 38 1980・7・6 劉靖之<羅曼・羅蘭的<貝多芬伝>>(『明報』15卷8期,

- 香港, 1980年8月号)
- 39 1980・8・10 成柏泉<《約翰・クリス朵夫》在中国>(『読書』1980年8期)
- 40 1980・9・ 傅雷訳<約翰・クリス朵夫>4巻〔《外国文学名著叢書》の一つとして, 人民文学出版社から文革後に発刊された。羅大岡の「序文」〕
- 41 1980・10・ 羅大岡訳<母與子>(上), 人民文学出版社刊〔『魅せられたる魂』の訳で, 中国では初訳〕
- 42 1980・12・10 柳前<重読<約翰・クリス朵夫>的随想>(『読書』1980年12期)
- 43 1981・3・ 崔宗瑋訳, 羅曼・羅蘭<クロ代爾談象徵派兩大師>(『文芸理論研究』81年1期〔クローデルが象徵派の2大詩人, ヴィリエ・ド・リラダンとマラルメについて語ったのをロマン・ロランが記したもの〕
- 44 1981・4・10 艾珉<奔向光明的激流(読羅曼・羅蘭的<母與子>) (『読書』1981年4期)〔ロマン・ロランの『魅せられたる魂』についての紹介の文章〕
- 45 1981・6・7 蔣俊<一部褒貶失当的作家評論專著(評<論羅曼・羅蘭>) (『文芸報』1981年11期)〔羅大岡著『ロマン・ロラン論』への批判〕

マルヴィーダとロランの往復書簡（補1）

I マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1890年3月13日、木曜日

今晚、もう何時になったかに気付いたとき、わたしは自分を咎めました。早く休むようあなたに注意しておきながら、あんなに長く引き止めてしまったのですから。どうか身体にさわらなければ、と思います。もしよければ、今後はもっと早く——8時に——来て下さい。そうすれば、わたしの利己主義^{エゴイズム}が責められる結果にはならないでしょう。（———）

もしバッハの音楽をもって来て下さるなら、グエリエーリ夫人¹⁾はとても喜ぶと思うのですが。

さようなら、では明日また。

M. マイゼンブーク

注

- 1) Guerrieri-Gonzaga 侯爵夫人。ロランの「したいソフィーア」の母親と思われる。

II ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1890年3月14日、金曜日

敬愛するマドモアゼル、たった今いただいた温かいお手紙にたいし、どうお礼を申してよいか分かりません。わたしに関心を寄せて下さるのは何というご親切でしょう！ どうして利己主義^{エゴイズム}などを口にされ、わたしをこれほど幸福にしてくれるものを、ご自分には咎めたりなさるのでしょうか。芸術がわたしたちに恵んでくれる、あの静かな快い感動——音楽という天上的な糧（それはわたしたちに永遠を保証し

てくれるものです)を誰か他の人と共にすること——これにまさる喜びが一体あるでしょうか?

わたしは仕合わせであるべきありとあらゆる理由をもっています。そしてもしわたしの中に生きている、あの深い喜びを他の人びとに伝えることができるなら、わたしの不安定な精神にも拘らず、いつも完全に仕合わせであったでしょう。しかし他の人びとはこの喜びが理解できないので、たいてい無頓着のままです。わたしは自分の仕合わせをいつも自分ひとりで味わっています。不運にもそうなのです。わたしはこのことで非常に苦しみます。それで、自分の感じることを、考えることをあなたにお話できるという喜びがどれほどのものか、つまり、自分の口で語るのではなく(自分の口で語る勇氣はまだありません)、わたしの愛する偉大な友——バッハやモーツァルトやその他の者たちの声をとおして語れるという喜びがどれほどのものか、それはご想像いただけることと思います。ですから、もし利己主義が問題になるのなら、尊敬するマドモアゼル、それはわたしの方です。あなたに——そう願いたいのですが——ささやかな喜びを与えることで、わたしは仕合わせになるのですから。

R. ロラン

ここで書いていることは、今晚あなたに言うこともできるでしょう。しかしわたしは自分の感じていることを言えないのです。よくこのことで苦しみます。そして苦しんで当然なのです。わたしが悪いのですから。

Ⅲ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1890年3月16日

あなたの健康が心配です。あなたが何と言われようと、わたしが悪かったと思います。あんなに湿っぽい日に庭園¹⁾で腰かけてはいけなかったのです。それで気が咎めます。もう長くローマにいるものとして、わたしは、ここの風土にまだ慣

れていない人びとが天候の影響を受けないよう配慮すべきなのです。あなたかお母様を待っている今はとくにそうです。(―――)

どんな具合か一筆お願いします。くれぐれもお大切に。

注

1) 次の手紙にある Villa Mattei のこと。マルヴィーダが愛した散歩の場所。

Ⅳ ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1890年3月17日、月曜日の夕

敬愛するマドモアゼル、わたしの健康をこんなに気遣って下さり、何とも申し訳ありません！ わたし自身よりも深刻にお考えになるのですから、わたしは今後いさかも病気に罹らないようにしてみせます。

有難うございます。今日は具合がよくなりました。まだ少し喉が痛むだけで、頭痛のほうはもう殆どありません。自分の上機嫌を失わなかったのは格別です。これは病気が大したことなかった証拠です。

どうか自分を責めるのはお止め下さい。わたしの罹った病気の責任はまったくわたしにあります。そして今度の場合、お別れしたあとで引いた軽い鼻かぜの原因もそうです。ついでに申しますが、この素敵なヴィラ・マッテイが危ういところだなどと、わたしはけっして認めるわけにゆきません。

この水曜日の晩には、ご心配下さるのが間違いだったことを証明するつもりです。(―――)

わたしにお寄せ下さる、愛情あふれる関心にたいし、衷心からお礼を申しあげます。

R. ロラン

V ロランからマルヴィーダへ

ローマにて
1890年3月末

敬愛するマドモアゼル、この手紙を書き始めましたが、それを受け取られるかどうかは、まったくわたしに分かりません。読み返すときに破いてしまうことは大いにありえますから。これまでもこんなことがありました。

どうしてあなたにお手紙を書くかご存知でしょうか？ それはわたしが退屈しているからです。馬鹿げたことです。そうではありませんか？ しかしご親切にも自分をわたしの女友だちとお呼び下さったからには、わたしの中にひそんでいる不愉快ないろいろの性質もあなたに知っていただかねばならないと思います。ああ、もうすでにあなたはそれを発見されたことでしょう——少しばかり、ほんの少しばかりにせよ。

いつだったかあなたは、退屈を知らないと言われました。わたしは退屈について説明できます。しかし本来ならわたしは退屈を知るはずはないのです。わたしの生活は朝から晩まで充実しています。目論んだことをすべて実行するには至りません。それでいてなお退屈する暇があるのです。わたしは歴史と音楽と文学を修め、小説を一つ書いています。¹⁾わたしの精神は無数のこまかな心配で悩まされます。わたしは陳腐なものを読み、かつ聞くように強いられます。わたしはそれでも退屈するのです。いくらかの日にはとくにひどく。そうになると何もかも気に入りません。ピアノを弾くのはうんざりします。自分の書いたものに腹が立ちます。その他のことはもっと厭です。ごく少数の友だち——わたしをよく知れば彼らもわたしを愛することはないでしょうが——を除くと、わたしはまったく孤独です。周囲にはどうでもよい奇妙な人間が大勢います。これがわたしには耐えられません。わたしは自分の中に引きこもり、他の人間と同様に自分自身が厭になります。自分の人生が無意味に思えます。自分が滑稽に見えます。自分をなぐりつけたい気持がいちばんです。他にすることが何かあるでしょうか？ 退屈することです。——そしてそれをわたしは几帳面にやっているのです。

少なくともあなたまでも退屈がらせてはなりません。しかし、どうかわたしのことを笑って下さい。笑われても仕方がありません。こんな告白はいけないと思いがらも、わたしはこんな告白に打ち勝てない弱い人間なのです。

退屈するあなたの友 *Votre ami qui s'ennuie* (これは韻が合います),

R. ロラン

わたしが腹の立つことをもう一つ。それは退屈が馬鹿げたものであることです。退屈はロマン派を思い起こさせます(パイロンとベルリオーズ参照)。そしてロマン派をわたしは憎みます。

注

- 1) ローマ周辺を舞台にした小説(原注)。— おそらく、自伝「青年時代の思い出」のなかで言及されている、『ローマの春』と題する未完の恋愛小説を指すのであろう。

Ⅶ ロランからマルヴィーダへ

フィレンツェにて

1890年4月2日、水曜日の夕

敬愛するマドモアゼル、今日は水曜日であったことを考えています。この何ヶ月か水曜日の晩は、わたしたちのバッハのあの深い深いモノローグに耳を傾けたあとで、共通の関心について打ちとけた会話を重ねながら一緒に過ごす習慣になっていました。それでどうか今晚あなたに書くことをお許し下さい。そうすれば、あなたのそばに居ながら、母と妹のそばにも居る心地がしますから。

約束どおりわたしは、こんどの旅のパートナーと日曜日の晩にピサで落ち合いました。彼らは— 旅がたいへん面白かったので— それほど疲れてはいませんでした。しかし北イタリアでは春はまだ始まったばかりです。パリより遅れているかも知れません。わたしたちはピサとルッカを見物しました。わたしはこの二つの町にみる市民的な平安と重厚な気品を愛します。ことにルッカが好きです。土塁の群れが

くる快い小風景。緑に輝く平地。薄もやにかすむ青い山々の柔らかな線。それを緑
どり覆う金色の雪。いくつもの美しい教会。——ルッカの典雅な彫刻家。わたしは
彼をこれまで殆ど知りませんでした。その晴れやかな優美さには感心させられま
す(マッテオ・チヴィターリ¹⁾)。——それから中でもティントレットの一枚の見
事な画²⁾。それは色彩に輝き、生気の迸るスケッチですが、これだけのためにもルッ
カに旅したくなります。

ピサでは主として広場の全体的な印象を楽しみました。斜塔はもし傾いていな
ければ、もっとわたしの気に入ることでしょう。そしてオルカーニャ³⁾の Fresco 壁
画は本当ならもっと感心してもよかったです。ほかの時なら、いつだって、ひ
じょうに気に入ったことでしょう。しかしわたしはその時その時の神経質な気分
に少しばかり左右されます。今朝はといえば太陽があまりにも明るく、光があまり
にも快かったので、それがわたしの心にも移りました。それでわたしの心は「死の勝
利」(それはわたしの心にとって、この春の日にはそぐわないように思えました)
に背を向け、好ましいゴッツォリ⁴⁾——素朴、軽快な優雅さに溢れるあのゴツ
ォリの愛らしい魅惑に浸るために。さて、フィレンツェにはすでに丸一日いた
ことになります。かつてわたしが辛い思いで立ち去り、ローマでは絶えず憧れ
たこのフィレンツェの町に。わたしがまず訪問したのは15世紀のわたしの友人
たちです。感動に満ちた再会でした。しかしあの時と同じ感動はもうありません。
あの時、彼らがわたしに与えた印象はいま以上に深いものでした。今晚わたしは、
フラ・アンジェリコとボッティチェリの許で少しばかり夢みるためにアカデミア美
術館に出かけました。ところで通りすぎようとするわたしを釘付けにしたのはミケ
ランジェロです。「ブルトウス」の激しい軽蔑の眼差しは、わたしが夢中になっ
ていた「春」⁵⁾のえも言われぬ魅力を、期待していたように楽しむことを妨げまし
た。このことが少なくとも、わたしがローマであなたにお話した心配から解放して
くれました。あの頃わたしは、だんだん感覚が麻痺し、わたしがその中に生きてい
る柔かな夢幻の気分のうちに消沈してしまうように思えました。わたしは、このあ
まりにも誘惑的な自然の中でわたしの人格が消失しはしないかと不安でした。しか
しフィレンツェへ戻ってみると、最初の旅行の時ほどには、せんさいな、洗練され

た、感性的な芸術家たちには感銘を受けません。いまわたしを魅了するのは、情熱的な、力強い芸術家たちです。

15世紀フィレンツェのすべての芸術家のなかでは、いまはギルランダイオ⁶⁾がいちばん気に入ります(レオナルド[・ダ・ヴィンチ]には触れません)。サン・ミニアート教会にも再会しました。フィレンツェはいつも素晴らしいです。しかし[ローマの]ジャニコロの丘の多様な色調はここでは求められません。

ああ、わたしの敬愛するマドモアゼル、あなたはわたしのためを思って、ちょっとした裏切りをなさったのではありませんか？ わたしが旅立つ前の晩にわたしとあの散歩をなさったのは、すっかりローマの魅力の虜にしておいてから、わたしをフィレンツェに向かわせるためだったのです。つまり、トスカナ地方の自然の誘惑にも抵抗できる状態にしておいてです。これがあなたに成功したのではないかと思えます。しかしローマから遠く離れた今、わたしの思いはローマばかりでなく、そこにわたしが残して来た人びとも馳せるのです。

さようなら、したいマドモアゼル。

心からの敬意をこめて

R. ロラン⁷⁾

注

- 1) Matteo Civitali (1436 - 1501)。ルッカの大聖堂に多くの名作を残している。
- 2) (ヴェネツィアのアカデミア美術館所蔵の)「聖マルコの奇跡」の下絵を指すのであろう。
- 3) Andrea Orcagna (14世紀)。ピサの大聖堂に隣接する墓地 Campo Santo を取りまく建物(納骨堂)には壮大なフレスコ壁画がみられた(第二次大戦で破損)。その一つ、「死の勝利」は以前にはオルカーニャの作と考えられていた。
- 4) Benozzo Gozzoli (1420 - 97)。メディチ家の礼拝堂のフレスコ壁画がとくに有名。

- 5) ボッティチェリのこの名作（ウフィツィ美術館所蔵）は当時アカデミア美術館に展示されていたのであろうか。
- 6) Domenico Ghirlandajo (1449-94)。ルネサンス期のもっとも優れたフレスコ画家の一人。フィレンツェで生まれ、没した。
- 7) この手紙には次のような住所が付記されている — Firenze, Casa Nardini, Bergo S. S. Apostoli 17.

Ⅶ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1890年4月5日、土曜日の朝

　　したいあなたのお手紙、たいへん嬉しいでした。魂と魂の結びつきは遠く離れていても働いている、というわたしの想像があらためて裏書きされました。水曜日の晩、この数週間というものこの曜日の晩を満たしてくれた非常に楽しいものが欠けているのを感じたとき、わたしはしきりにあなたのことを考えました。そしてその瞬間にあなたがわたしに手紙を書いて下さることを信じて疑いませんでした。お手紙でそれが正しかったこととなります。しかしわたしは自分の思考をきびしく監視していますので、このようなことを利己的な動機から願ったことは一度もありません。あなたにたいしては、ほんとうに次の一つの願いしかないのです — それは、あなたを取りまく一切のものを、そしてあなたが愛する一切のものを十分に享受することであなたが仕合わせであるように、という願いです。わたしの大切なフィレンツェ（わたしは心から愛しています）にわたしが裏切りを働いた、というあなたの言い分が不当であることがこれでお分かりでしょう。しかしそれでも、わたしたちの散歩 — それをわたしが提案したのは、交響曲のあの下手な演奏でかき乱された調和を回復するためにすぎなかったのですが、それがこんな結果を生んだことをたいへん嬉しく思います。ローマの魅力があなたを征服しはじめても、それを嘆くのはお止めなさい。あなたはロマンという名前からして、ローマを愛するように選ばれているではありませんか？　そして、いいですか、わたしたちが強固な者、

不敗の者となってそこから現われ出るその「夢想」はよい夢想です。つまり、わたしたちの眞の本性、わたしたちの自我の形而上的部分がその中で生まれる夢想なのです。その夢想はわたしたちをさしあたり一種の甘美な麻痺状態に陥れますが、しかしやがてわたしたちがそこから新しい自意識をもって目覚めるような夢想なのです。それに、ローマは愛されるに値します。そしてローマであなたが見出した友人たちが、もしその芽生える愛のささやかな原因にもなっているとすれば、彼らはそのことを大いに喜び、あなたの愛着には十二分にむくいるに違いありません。

あなたの二週間の休暇はもう半分すぎました。これからもたっぶり享受して下さい。そしてトスカナの地への激しすぎる憧れはもたないで、わたしたちのところへ帰っていらっしゃい。

M. マイゼンブーク

Ⅷ ロランからマルヴィーダへ

フィレンツェにて

1890年4月7日、月曜日の朝

それではわたしの手紙を待っていて下さったのですね、敬愛するマドモアゼル？もしわたしが書かなかつたとすれば、ちょっとした責めを負うところでした。お待たせしないために、さっそくお返事することにします。

尊敬するマドモアゼル、もしまた外出された時には、あなたの隣人モーゼ¹⁾の前で礼拝して下さい——わたしの名前で。この一週間というもの、わたしはすっかりミケランジェロの中に生きています。最初の旅行の折には、15世紀の優雅なフィレンツェ人たちの完成した技能と好ましい魅力——ポッティチェリとフィリッピーノ・リッピが、彼らへの深い愛情ですっかりわたしを満たしていたため、ミケランジェロにたいしては、いくぶん冷やかな感嘆のほかには僅かのものしか残っていませんでした。しかし今度は彼はわたしを征服しました。——かつてベートーヴェンが征服したように。おお、なぜわたしは彼をもっと熱烈に愛さなかったのでしょうか！ 何という軽蔑、孤独、偉大さ！ わたしには彼がよく理解できているのかど

うか分かりません。その真実全体において彼を認識していないことはまず確かです。しかしわたしは彼を理解するがままに彼を愛します。昨日はもう一度サン・ロレンツォ教会を訪れ、あの二つの崇高な群像——「行動」と「思索」——を見ました。²⁾憂うつな「思索」。そのもっとも奥深い魂は台座の彫像に表現されています——すなわち、意志に反して新たな生の倦怠へと目覚める「朝」と、疲れた顔を永遠のまどろみへと傾け、過ぎ去った生についての悲哀を無言のまま告げる「夕」の中に。それに向き合って雄々しい「行動」。晴れやかな無疵むじらのすがたです。しかしその魂の奥底に荒れ狂う情熱は「昼」の侮蔑的な憤怒となって噴出します。「昼」は生ける者たちに向かって、怒れる幽鬼のような顔を肩ごしに一瞬のぞかせたかと思うと、たちまち引きこめ、情熱をはらんだ孤独の中へと閉じこもるのです。夜が近づき、死が近づきます。そして力は挫けます。—押し殺され、しかも激しさは鎮められることなく。

一方その間、メトロノームのように規則正しくこのミケランジェロの礼拝堂を通りすぎる、教養人を気取った外国の観光客がおかしくてなりません。五人の若い令嬢お嬢がことに面白いでした。彼らは入って来ると大きなベンチに腰を下ろしました——横木に止まった若どりのように行儀よく並んで。たつぷり五分間、彼らはベデカー³⁾に読み耽りました——真剣に、一言もしゃべらないで。それから五人はバネで弾かれたように一斉に腰を上げ、礼拝堂の中央に並んで立ち、そして柄付きメガネを一つ、二つ、……四つ、オペラグラスを一つ、「思索するもの」に向けます。それからさっと回れ右をしてオペラグラスが一つ柄付きメガネが四つ、「夜」に向けられます。——さらにマドンナへと向きなおり……そして、さようなら。ところで彼女たちは大まじめでした。まるでよく理解しているような様子さえありました。これらの彫像をひっきりなしに通るすぎる哀れな愚か者たち。彼らはミケランジェロが石の中に呪縛したもの——生の倦怠と人間への軽蔑が、まさに自分たちと自分たちの仲間に係わっていることを感じないのです。もし神性しんせいをめぐるわたしたちの多様な感情に祠いほを建てることのできるなら、わたしは崇高な軽蔑に一つ建て、ミケランジェロの作品をそれに配するでしょう。

復活祭には盛大な教会の行事をいくつか見ようと思いました。聖土曜日にはサン

タ・マリア・デル・フィオーレ⁴⁾で花火をつめた厚板細工の鳩が一羽、Gloria in Excelsis「天においては主に栄光あれ」⁵⁾と歌われている時に、教会の端から端まで飛び、前の広場で一台の山車かまこに火をつけるのを見ました。

復活祭の日曜日には或る大がかりなミサに参列しましたが、祭壇に六本のローソクが燃え、息切れするオルガンが舞曲のような牧歌を奏する中で、大司教枢機卿に法衣を着せては脱がせ、脱がせては着せ……、そして司教冠をかぶせては取り、彼を飾り立て、香煙で包み、礼拝し……といったことでほぼ尽きていました。——幸いわたしの祭典はサン・マルコ修道院⁶⁾で行うことができました。フィエーゾレ⁷⁾への散索の途上に訪れ、フラ・アンジェリコの人の心を打つ質素な魂に敬虔な思いを寄せたのです。

或る午後のこと、わたしはフィエーゾレの聖フランチェスコ修道院でポッティチェリふうの風景を見ているうちに我を忘れました。ビロードのように柔かい緑の芝生の敷物から伸び上る、ほっそりした、厳肅かつ優美な真黒い糸スギとモミ。枝の間から覗く太陽、光に浸された遠景。草の間に点散するスマイル色のアネモネの花。中まで入れなかった母は、どうとう、わたしが永久にこの修道院にとどまるつもりなのか、と尋ねました。そうです、どこか人気がない美しい土地おとこにこんな素晴らしい魂の避難所を訪れるたびに、そこを離れたくないという秘かな気持ちに襲われます。しかしわたしの家族は心配するには及びません。生の影で満足するには——いや、神の影であっても、それに満足するには、わたしの心はあまりにも生そのものに執着しています。

これまでにお話したことのある本を一冊バリから持って来てもらいました。『アクセル』です。わたしの友人シュアレスの愛する師、ヴィリエ・ド・リラダン伯の遺作であり、彼の哲学的な遺言状です。⁸⁾ワーグナーにおけるのと同様、ここでも富と恋の断念がテーマです。ただその断念はワーグナー以上に絶対的です。さいごに主人公は至高の恋という幸福の絶頂に達したあと自殺します。この本には多くの奇妙なもの他に見事なページがいくつもあります。敬愛するマドモアゼル、あなたはこの作品を読んでみたいとお思いになるでしょう。

木曜日——ともかく金曜日にはフィレンツェを出発します。そしてウンブリア地

方を旅行して、たぶん日曜日か月曜日にはローマに到着します。

母がよろしく申しております。

心からの敬意をもって、

あなたの R. ロラン

注

- 1) マルヴィーダの住居は、モーゼの彫像のあるサン・ピエトロ・イン・ヴィンコーリ教会のそばに位置していた(原注)。
- 2) メディチ家の霊廟、サン・ロレンツォ教会のいわゆる「新しい聖器室」Sagrestia Nuovaとその内部の彫像の制作には、ミケランジェロが20年ちかい歳月を捧げた。—ウルピノ大公ロレンツォ二世(1519年没)の彫像はその姿勢と表情から「物思いにふける人」(Il Penseroso)と呼ばれ、その足下の左右に「朝」と「夕」が、また行動的なネムール大公ジュリアーノ(1516年没)の彫像の足下には、左右に「昼」と「夜」がいずれも擬人化されて横たわっている。
- 3) ドイツの有名な旅行案内書。
- 4) フィレンツェの大聖堂。15世紀前半。
- 5) ミサの一部、「グローリア」の冒頭のことば。
- 6) 15世紀前半、画僧フラ・アンジェリコがここに住み、僧房のために—「受胎告知」を含む—一連のフレスコ壁画を描いた。
- 7) フィレンツェ北方の小高い丘に位置し、古代と中世の遺跡に富む。この地からの見事な眺望でも知られている。
- 8) この劇詩は作者の死の翌年、1890年に出版された。したがってロランは最新刊を手にしたことになる。ヴィリエ・ド・リラダンとロランの関係については「ユニテ」3(1975)所収の書簡Ⅱをも参照。

Ⅴ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1890年4月または5月、土曜日

したいロラン、ちょうどミンゲッティ夫人から葉書を受け取ったところです。彼女は明日、大きな賞の授与に行かねばならず、それで彼女の愛する日曜日¹⁾を次まで延ばします。あなたが無駄足を運ばないように、このことをお伝えしておきます。

(―――)

もしローマがあなたの健康にも資するなら、わたしはどんなにか嬉しいでしょうに！ あなたがローマを愛することを、なぜ人びとが好まないのかわたしには分かりません。わたしの考えは違います。真実の、高貴な幸福感に満ちた瞬間は、すべて未来のための財宝なのです。わたしは理想の世界と義務の世界とが絶対に別々でなければならないとは思いません。この二つを相互に近づければ近づけるほど、それだけ一層よいのです。それは、一方の世界の反映がもう一方の世界を明るくするからです。――ちょうど、みずからの光をもたない星辰が全能の太陽神アポロによって燃えるのと同じです。ですから安心してこれらの爽かな光線を浴びて下さい。そうすることで人生の寒い日々のための熱を集めることができます。高貴な資性をもつ人間は純粹かつ崇高な喜びの中ではけって自分の平衡を失うことはありません。反対に彼らはわたしたちの必要とする雄々しい力をそこから汲むのです。

またもやお説教を始めました。ご免なさい。わたしのしたい友――こう呼ぶことを許して下さい。わたしがこんな呼び方をするのは、心底から出た場合だけであることをあなたはご存知です。

もし明晩お出でになるつもりなら、わたしは在宅しています。

M. M.

注

- 1) Donna Laura Minghetti 夫人は毎日曜日の午後、友人や知人、それにローマに逗留する外国人――とくに芸術家を客に迎えた(原注)。

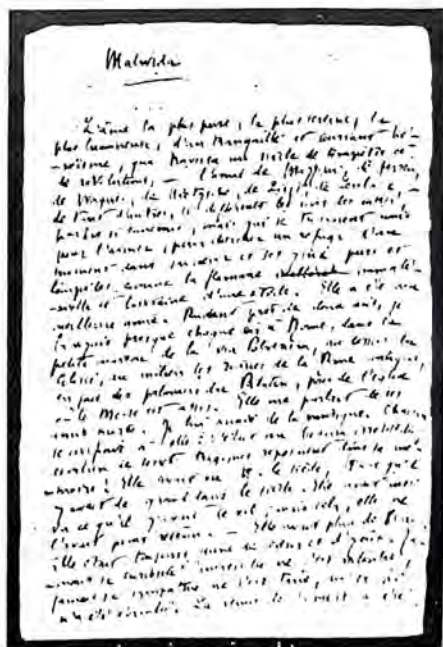
< 訳者あとがき >

『ロラン＝マルヴィーダ往復書簡(1890-91)』(B、シュライヘア編、1932年)の抄訳は「ユニテ」11(1980)でひとまず終了したが、このたび若干のものを追加することになり、『往復書簡』の最初の9通を訳出してみた。「ユニテ」2(1974)の6通がこれに続くわけで、通読していただければ幸いである。

南大路 振 一

お詫びと訂正

「ユニテ」2(p.7の注1)にあるミンゲンティ夫人はミンゲッティ夫人の誤りでした。お詫びして訂正させていただきます。(編集部)



ロランのマルヴィーダ覚え書

蛭原徳夫

ロマン・ロランが始めてタゴールの存在を知ったのは、1916年10月のことと思われる。ロランは当時の日記に、《予期されることではあったが、アジア人がヨーロッパの弱点を意識している。今年の6月18日にラビンドラナート・タゴールが東京の帝国大学で講演をした。彼は日本に対して、ヨーロッパ文明についての警告をしている》と書き、その講演の要旨を次のように記録している。《……日本はアジアの前衛となっていて、新しい道へ自分について来るようにと、アジアに呼びかけている。……しかし、ああ日本人たちよ、あなたがたはその近代文明を、そのまま受け入れてはならない。あなたがたこそその文明に、あなたがたの東洋精神が要求するような変化をとげさせねばならない。あなたがたの責任は大きいのだ。あなたがたこそ、機械的な構造だけのものに生命を吹きこんだり、冷たい利益計算であるものを人間の心情に替えたり、力と功利とだけが支配する場に、諧調的で生きた発展と、真実と、美とを、行きわたらせるべきなのだ。——ヨーロッパからわれわれのところに伝わる文明は、食欲であり、威圧的であり、侵略してその国民を消耗させたり、征服の歩みを妨げる民族を駆逐したり絶滅させたりする。それは人食い人種的な傾向をもつ、まったく政治的な文明であり、弱者をしいたげたり、弱者を犠牲にしてみずから富んだりする。それはものを破砕する機械である。それはいたるところに嫉妬と不和とをまき散らし、自分の前方を空地にしてしまう。——それは人間的ではない、科学的な文明である。そのもつ勢力は、それがみずから富むという唯一の目的のために全力を集中することから生じているのであり、ちょうど百万長者が自分の魂を犠牲にして富をえるのに似ている。それは愛国精神の名目のもとに、平然として約束を破ったり、恥じらいもなく嘘言の網を張ったり、みずから尊崇する利得の神のための寺院に、巨大で奇怪な偶像を立てるのである。われわれ

はためらうことなしに、あえてこう宣言する。すなわちそういうことすべては、永久に持続することはないであろうと。なぜならこの世には、集団にも個人と同様に適用させる至上の道徳的法則があるからである。あなたがたは国民の名においてもその法則を破ってはならないし、その法則を尊重する人びとに利益がもたらされるからといって、個人的にも勝手にその利益を享受しようと考えてはならないのである。そんなふうには道徳の理想をくつがえしてゆくと、けっきょくはその反動が社会の各成員の上に及ぶことになり、社会を弱体化させたり老衰化させたり、人びととのあいだに不信や無恥感をひそかに生みだしたり、人間のうちにある神聖なものを滅し殺したりすることになる。……それは天からの法則に対する反逆であり、その結果は必然的に大いなる混乱を生じさせることになる……」ロランはこの講演を「世界の上で一つの曲がり角を示す」ものだが、「ヨーロッパの大新聞は一紙としてこれを報じているものはない」とも記す。ロランはこれをニューヨークの“The Outlook”誌1916年8月9日号で読んだのであり、「これはすべて大体において正しい。しかし日本もまたその責任をとらなければなるまい」とも書いている。タゴールの帝国大学における講演は、大正5年に来日した際におこなわれたもので、「日本によせるインドのメッセージ」という題名のもとに、当時の日本の軍国主義的動向や利潤追求の商業主義を鋭く批判したもので、タゴールが日本の精神の本質に礼節謙譲の美德を認め、日本の文化の特性に、自然との融和の優雅に共感して、日本を心から熱愛してただけに、その論調は一段ときびしさとはげしさを帯びていた。このために、はじめはインドの詩聖を迎えた日本の熱狂的な与論が、手の平をかえすように冷却してしまったと伝えられる。

『ロマン・ロランとタゴール』（レグルス新書）から

ユニテの広場

「ロランを知った頃」

寺田 由美子

とても広い講義室に大勢の若者が集まって教授が来るのをほとんど子供時代の様な緊迫した雰囲気でもなく……待っていました。そして私もそんな若者の中のひとりでした。選択科目の中からあまり期待もせず選んだ「文学」でした。だって私は絵をかきたくて精華へ来たのですもの。教授は短い挨拶の後、大きく黒板に、Romain Rollandと書かれました。きっと教室の一番後の隅に座っていてもはっきり読めたでしょう。初めての授業のたった一時間で先生がどれほどロランを愛しているのか、その誠実な気持ちを感じ取るのに十分でした。講義が終わるやいなや、自分でもわからない位、まるでお芝居いのプロローグを観ている様な、わくわくした気持ちで書店へ走って行きました。四年前の4月14日けつて忘れる事の出来ない、これが私のロマン・ロランとの、ジャン・クリストフとの一番最初の出会いです。一人は生活や地位が変化するにつけ、その時その時の状況に慣れてしまい、自己を反省しより人間らしく向上させる努力をする事を忘れてしまう場合が多いけれど、どんな境遇に面しても変わらず純粋な追求心にその全身を尊く包み込み、音楽の世界に生き、友情や愛情を信じて育て続ける、クリストフの生き様にどんなに感動した事でしょう。週一回の文学の講義を待ち遠しく思い、図書室に行っては美術書の前でなくロラン全集の前に居る時間の方が長くなっていた頃、偶然研究室でゼミの教授に、そんな思いを話した所、ぐるり御部屋を囲んでいる書棚の中から、さっと古い文庫本を、もうすっかり茶色く変色している、でもとても愛読されていたものかしら、取り出され貸して下さいました。「クラルテ」と表紙に書かれているのにその時はバルビュス、ロラン論争について私は皆無だったのですから。まったく。—あの頃よりも少しはロランセミナー等を通じてロランについて学んでいる今、

思い出すたびに、なんて贅沢な環境の中に居ながらと、自分に呆れもしますが、そんな恵まれ過ぎた中でロランに巡り会えて、桜色と若苗色に京都の町が包まれ初めると、あの頃のドキドキした気分を懐かしく思い出します。そして、彼の作品の中でいつも、訴え続けられている「魂の自由」について、私も生涯考え続けて行きたいと思っています。

友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会例会は、現在までに通算263回をかぞえています。その活動状況は下記のとおりです。

1980年11月22日(土)

260回例会

第85回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：『クレランポー』第4部

発表者 位田 美津子

出席者 12名

アリーヌのお産の見舞い、戦争廢疾者モロー青年との、そして同じくジロー青年との出会い、等によってクレランポーが辿っていく精神の軌跡を、1917年、ロシア革命のニュースが伝えられて人々の間にまきおこる渦を背景に描き出していく。第3部で真理をかかげて行動を開始したクレランポーが、第4部では愛に立ち戻って気負い立った青年達に語りかけ、青年の心をほぐしていき、又逆に青年たちから慰められ励まされる。本来の宗教観に立って慈悲慈愛に満ち、永久戦争という輪を断ち切りたいと願うクレランポーの姿を、よくまとめて発表された。遠く岡山市からこの発表のためにはるばる出てこられた位

田さんに心から感謝したい。

1981年1月24日(土)

261回例会

第86回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：『クレランボー』第5部

発表者 森 満夫

出席者 14名

クレランボーが2度目の回心によって置かれた静かな孤独の境地の中で、哀しみと愛の心で周囲の人を眺めて到達したのが、「イリュージョンよりも真理よりも人間を愛さなければならない」という心境である、と前章、前々章と遡って解説しながら、よく整理された論理で発表された。

あなた、それはまた私である、というユニテの思想。恩寵の宿る孤独。イザヤ書の言葉。等々、かなり難かしい部分を多く含み、意見も多く出たので、予定されていたロラン誕生記念日としての親睦の集いを持つ時間がなくなったが、総括を次回にゆずることとし、大層充実したセミナーとなった。終了後、和気霽々の記念撮影をして散会。

2月28日(土)

262回例会

第87回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：小説『クレランボー』をめぐって

講師 波多野 茂弥先生

出席者 19名

5回にわたって読みこんできた『クレランボー』を全体としてふり返ってみると、結局、個人主義の上に立ちながらも個人の自由がなく、

集団化の波にのみこまれてゆく戦時下の人間状況の中で、本来の自由というものを徹底的に問いつめてゆくことの困難さを、クレランボーの生き方を通してロランが強く訴えようとしたのが、痛い程感じられる。最後には自らの死をもって真の自由を守り抜いたクレランボーは、知性・愛・信仰という相反するものを総合的に体現したといえよう。

過去に体験した戦争中のことを考えれば、万人に反対する一人であることがどういうことであるかを、私たちは痛切に思わずにはいられない。貴重な意見が多く出て実りある総括となった。

3月28日(土)

263回例会

第88回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：ソフィアへの手紙 その1(1901～1903)

発表者 土屋 恵

出席者 9名

書簡集『したしいソフィア』をテキストとして、31年間にわたるソフィアへの手紙を読んでいくことになった。ロランの書簡の主題は多岐にわたり、仕事、友情、芸術、幸福、霊的なものなど、について率直に語られていることが報告された。

1902年のソフィアの結婚、1903年のマルヴィーダの死、というロランにとっても重要な出来ごとのあったこれらの年を通じて、書簡集の中にロランの精神のすべての大事な内容がふくまれていることを一同再認識した。これからこの書簡集を読み進んでいくことを大きな喜びをもって期待したい。

あ と が き

文化大革命の苛烈な試練を経た中国の文化状況が次第に明らかになるにつれ、中国でのロマン・ロラン研究についても詳しい情報が得られるようになった。思えば30年以上もの昔、私の手許のメモによれば1959年5月22日、関西日仏学館におけるロマン・ロラン友の会例会で、ささやかなノートを発表した。そのテーマは“中国におけるロマン・ロラン”。敬愛するロマン・ロランが中国でどのように読まれ扱われているかを、当時として知りうる限りの資料を集めてみたのであったが、“魯迅とロラン”、“巴金とロラン”、“艾青とロラン”、“茅盾とロラン”などの見出しのもとに、私なりの未熟なレポートが書き連ねられている。

もとより中国文学に素人であり、ロランの一愛読者にすぎない私にとって、この大きなテーマを掘り下げることは不可能とってよく、ただ興味からだけのものにすぎなかった。いつの日か、これらの研究がまとまった形をとって、日本でのロラン研究の一助ともなれば、との願いは長い歳月のあいだ私の心の奥に胚胎しつつしてきた。その甲斐あって中国文学を専門とする相浦の手により、ユニテ6号、8号につづいて今号の記事が書かれたことで、長い間の私の念願が叶えられたことに喜びを禁じえない。

マルヴィーダとロランの往復書簡(補1)は、南大路先生に編集部からご無理をお願いして短い期間に訳出していただいたが、先生のあとがきに述べられているように、以前連載させていただいた往復書簡の最初、ユニテ2号の1890.5.25日付の書簡の前にくる9通で、フィレンツェへの二度目の旅で、ロランがミケランジェロに征服される様子がよくわかり、ここからロランのミケランジェロへの傾倒がはじまったことを知るのは大変興味深い。その他、ヴィリエ・ド・リラダン伯のことなど、いずれ劣らぬ貴重な内容に富み、読者へのこの上ない贈物と思われる。先生のご尽力に深く御礼申しあげたい。

広場の寺田由美子さんは若い染織家、大学で日高六郎先生のゼミに籍をおいてロランに出会ったという方である。今後の研鑽をいのりしたい。

現今の情勢の中で一層確たる魂の拠りどころとして「ユニテ」を育てるために、会員の皆さまのふるってのご投稿を切に期待する。

(編集部 相浦綾子)

投 稿 歓 迎

- ロマン・ロラン友の会の会員であれば、誰でも自由に投稿できます。現在のところ枚数の制限はしておりませんので、何枚書いて下さっても結構です。ただし、掲載の都合で何回かに分けたり、適当に削ったりすることがありますので、ご承知ください。
- 原稿は必ず、400字詰、または200字詰の原稿用紙に横書きにして、ロマン・ロラン研究所あてにお送り下さい。
- 締切日は特にもうけてはおりません。年2回発行を原則としておりますので、随時お送り下さい。
- 原稿を掲載した方には、原稿料に代えて、当該「ユニテ」を5部贈呈いたします。

「ユニテ」 編 集 部

ユニテ 第3期 第13号

発行日 1981年3月31日
発行所 財団法人 ロマン・ロラン研究所
京都市左京区銀閣寺前町32
TEL(075)771-3281
印刷所 昭和堂印刷所
京都市左京区百万辺交差点

- /RR/S/17/ Rolland, Romain: Souvenirs de Jeunesse 1866-1900.
-Pages Choiesies- (La Guilde du Livre, 1947)
- /RR/S/13/ Rolland, Romain: Valmy. (Editions France d'Abord, Paris, 1946)
- /RR/S/14/ Sorella: Histoire d'Une Amitié. -Nombreux Textes Inédits de Romain Rolland et Alphonse de Châteaubriant- (Librairie Académique Perrin, Paris, 1962)
- /RR/S/15/ Rolland, Romain: Handel. (Kegan Paul, Trench, Trubner and Co., LTD.)
- /RR/S/16/ Rolland, Romain: Meister Breurmon. (Literarische Anstalt Rütten und Loening, Frankfurt a.M., 1922)
- /RR/S/17/ Rolland, Romain: Goethe und Beethoven. (Rotapfel-Verlag a.-G., Zürich und Leipzig, 1927)
- /RR/S/18/ Академия Наук СССР: Робен Роллан 1866-1966. По Мамерчалам Юбилейной Сессии. (Издательство "Наука" Москва, 1968)
- /RR/S/19/ Gruttoff, Otto: Romain Rolland. (Literarische Anstalt, Frankfurt a.M., 1914)
- /RR/S/20/ Rolland, Romain: Lettres de Romain Rolland à un Combattant de la Résistance. (L. Rodstein Libraire-Editeur, Paris, 1947)
- /RR/S/21/ Suarès, André: Extraits de la Correspondance Inédite Suarès-Romain Rolland.
- /RR/S/22/ Guilbeaux, Henri: Pour Romain Rolland. (J. -H. Jeheber, Libraire-Editeur, Genève, sans date)
- /RR/S/23/ Maxe, Jean: Les Cahiers de l'Anti-France. L'Idole 1' "Européen" Romain Rolland. (éd., Bossard, Paris, 1922)
- /RR/S/24/ Der Romain Rolland Almanach. (Liberarische Anstalt Rütten und Loening, Frankfurt a.M., 1926)
- /RR/S/25/ Ostrowski, Nicolas: Et l'Acier Fut Trempe... (Edition Sociales Internationales, Paris, 1937)
- /RR/S/26/ Zweig, Stefan: Romain Rolland, der Mann und das Werk. (Rütten und Loening, Frankfurt, 1921)
- /RR/S/27/ Zweig, Stefan: Romain Rolland, l'Homme et l'Oeuvre. (Ed. de la Baconnière, Neuchatel, sans date)
- /RR/S/28/ Rolland, Romain: Das Romain Rolland Buch. (Artemis-Verlag, Zürich, 1946)
- /RR/S/29/ Rolland, Romain: Europe. (Les Editeurs Français Reunis, Paris, 1955)
- /RR/S/30/ Dollet, René: Romain Rolland au Palais Farnèse (1889-1891). -Scènes de la Vie Diplomatique- (éd. A. Pedone, Paris, 1958)
- /RR/S/31/ Rolland, Romain, etc.: Les Oeuvres Libres, recueil littéraire ne publiant que de l'inédit. N° 20. (Arthème Fayard, Paris, 1947)
- /RR/S/32/ Rolland, Romain, etc.: Les Oeuvres Libres, recueil littéraire ne publiant que de l'inédit. N° 27. (Arthème Fayard, Paris, 1948)
- /RR/S/33/ Beethoven: Cahiers de Conversation de Beethoven (1819-1827) -traduits et présentés par F.-G. Prod'homme- (Editions Corréa, Paris, 1946)

- /RR/S/1/ Rolland, Romain / etc.: Collection des Lettres
Rainer Maria Rilke (1875-1926). (Librairie des lettres,
Paris, 1952)
- /RR/S/35/ Rolland, Romain / etc.: Rilke et la France. (Librairie
Plon, Paris, 1943 / Editions de Kogge, Bruxelles)
- /RR/S/36/ Rilke, Rainer Maria: Les Cahiers de Malte Laurids
Brigge. (éd. Emile-Paul Frères, Paris, 1935)
- /RR/S/37/ Bloch, Jean-Richard: Carnaval Est Mort, premiers
essais pour mieux comprendre mon temps. (Librairie
Gallimard, 1920)
- /RR/S/38/ Gillet, Luis: Claudiel Pécuy. (Editions du Sagittaire,
Paris, 1946)
- /RR/S/39/ Guéhenno, Jean: Caliban Parle, suivi de Conversion à
l'Aunain. (Editions Bernard Grasset, Paris, 1928)
- RR/S/40/ Tillier, Claude: Mon Oncle Benjamin. (Gallimard, Paris,
1931)
- RR/S/41/ Renen, Ernest: Le Prêtre de Nemi et l'Abbesse de Jourre.
(Calmann-Lévy, Editeurs, Paris, 1924)
- RR/S/42/ Romains, Jules / etc.: La Revue des Lettres Modernes
Georges Chennevière et l'Unanimité. (Revue des Lettres
modernes, Paris, 1965)
- RR/S/43/ Halévy, Daniel: Pécuy et les Cahiers de la Quinzaine.
(Grasset, Paris, 1947)
- RR/S/44/ Rouscel, Jean: Charles Pécuy. (Ed. Universitaires, Paris,
1953)
- RR/S/45/ Meysenbug, Malwida de: Le Soir de ma Vie. (Librairie
Fischbacher, Paris, 1908)
- RR/S/46/ Meysenbug, Malwida de: Mémoires d'Une Idéliste. Tome
Premier. (Librairie Fischbacher, Paris, 1900)
- RR/S/47/ Meysenbug, Malwida de: Mémoires d'Une Idéliste. (Librai-
rie Fischbacher, Paris, 1900) Tome Second.
- RR/S/48/ Commune. (Paris, 1935)
- RR/S/49/ Commune. (Paris, 1938)
- RR/S/50/ Rolland, Romain: Choix de Lettres à Malwida von Meysenbug.
(Les Bibliolâtres de France, Paris, 1948)
- /RR/S/51-1/ Rolland, Romain: Le Voyage Intérieur. (Albin Michel, Paris.)
- /RR/S/51-2/ Le Vendredi. (1936.1.24.)

高田博厚

翌日出発という最後の晩、ガンジーの一行は毎夕するという彼らの祈りの集いを、ヴィラ・オルガの客間で皆が列席してすることになった。今まで邸内に一步も入れなかった、群がる平和運動婦人連も、この集りには許された。毛皮の外套を着こんだ数十人の婦人たちに囲まれて、乞食のような薄ぎたない白衣のガンジーたちが輪を作って坐っているのは異様な風景であった。ロランはガンジーたちの輪の傍の肘掛椅子に坐り、私はその腕に腰かけた。小さな灯一つで、ガンジーたち三人は黙禱し、そしてつぶやくようにごく低く歌いだした。歌といえるものではなかった。人にささやくというよりも、自分の内部にひそかに語っているようなものであった。あのインドの神秘主義の源から低く一条に流れている水が、実に遠い実に高い星に昇って行くようであった。それが空漠の奥に消えるように終ると、彼らは瞑目して長く合掌した。ロランも私もまた彼らと共に合掌した。部屋に電灯がつくと、ロランはガンジーに御礼の挨拶をした。すると、ガンジーは「ミスター・ロラン、お別れのしるしにあなたのピアノをきかせてくれませんか」と言った。ロランは喜んで承知した。イギリス人のスレードの顔が輝いた。部屋いっぱいの婦人たちは喊声をあげた。ピアノのある二階にロランはガンジー一行を導いた。私は遠慮して残っていた。婦人たちは追いかけるようにどやどやと階段を駆け上ろうとした。上から家中が振動するような怒声でロランがどなった。「あなたたちは来るんじゃないっ！」しばらくしてマダム・クーダチェヴァが二階から降りて来、私にささやいた。「タカタ、ロランがあなたに来なさいって……」私はそっと上って、いつものように、ピアノの傍に立った。ガンジーたちは床に坐っている。ロランはグルックの「オルフェ」の妖精のワルツと、ベートオヴェンの「第五」のリストの編曲を弾いた。ミス・スレードは眼を閉じ首を振りながらきいていた。ガンジーはけろりとした顔をしていた。終ってロランがガンジーに微笑して言った。「ムッシュウ・ガンジー、音楽は魂の独白です。」(1931年11月)